

第1回健康診査等専門委員会の概要

1. 健診・検診の考え方について

健診は主に将来の疾患のリスクを確認する検査群であり、検診は主に現在の疾患自体を確認する検査群である。

健診は必ずしも疾患自体を確認するものではないが、健康づくりの観点から経時的に値を把握することが望ましい検査群であり、検診は主に疾患自体を確認するための検査群である。

健診において行われる検査項目の一部は、測定値等により疾患リスクの確認と疾患自体の確認の両方の性質を持つ。

2. 評価の考え方について

健康診査等の対象者や対象疾患を検討するに際し、健康診査等が満たすべき要件を整理するとともに、プログラムとしての評価を行う必要がある。

健康を維持するために必要な包括的な健診・検診システムが必要である。

特定健康診査等の主に将来の疾患のリスクを確認する検査群では、リスクの蓄積を阻止するための保健指導等の介入方法も含めてプログラムとして捉える必要がある。

健康診査等の対象者や対象疾患は有病率や社会的負担を考慮して検討することが望ましい。

健康診査等に関する新たな知見は日々変化していくため、定期的に評価し見直すことが望ましい。

健康診査等の費用対効果について検討していく必要がある。

3. 健康診査等の効果的な実施について

健康診査等を効果的なものとするため、円滑な実施を阻害する要因を検証し対処する必要がある。

健診・検診受診者には健康意識の高い者が多いことが知られており、効果的なものとするために健診・検診の未受診者を受診させることが重要である。

乳幼児健診など受診率が高いもので行われている工夫を、他の健康診査等へ応用できるか検討するべきである。

4．事後措置について

健康診査の特性に合わせた事後措置の在り方と確実な実施の方法を検討する必要がある。

がん検診等の主に現在の疾患自体を確認する検査群は陽性が陰性でよいが、特定健康診査等の主に将来の疾患のリスクを確認する検査群では、将来の発症リスクなどを事後措置の対象者に情報提供することが望ましい。

事後措置の実施状況など追跡調査を行う必要がある。

5．ライフコースを通じた健康診査等について

ライフステージや性差に応じた健康診査等の在り方を検討する必要がある。

生涯を通じた健診・検診システムに関する情報を提供することが望ましい。
各健康診査等のデータを統合することが望ましい。